東京の都市づくり 戦う東京・魅了する東京への挑戦

時代の最先端に対応できる街のかたち

岸井隆幸

さまざまな都市活動を支える都市の動脈である交通。（写真は都電荒川線王子駅前）

都市を望ましい方向へと適正に誘導する土地利用の計画・制度。

空間の質を高める都市のデザイン。

東京都市づくり：挑戦の歩み

今、江戸が「東京」と名前を変えてから150年、近代都市計画法が制定されてから100年、抜本改正された1968年都市計画法から50年という節目を迎えている。この間、東京は様々な困難に直面しつつも、常に挑戦を続けて、次の時代に適合するように、あるいは次の社会を導くようにその姿を変えてきた。

欧米列強諸国に追いつくべく始まった近代都市の建設は、1888年の東京市区改正条例に基づく市区改正事業、1923年の関東大震災後の帝都復興土地区画整理事業で旧江戸の範囲を整え、昭和初期の私鉄沿線宅地開発、第二次世界大戦後の戦災復興土地区画整理事業によってかつて「郊外」と呼ばれた地域にまで広がっていった。そして1964年の東京オリンピックを契機に新幹線、首都高速道路、羽田モノレールなどの広域基幹的な交通施設が整い、東京は急激に成長・拡大してゆく。地方部から流入する人を受け止めるために大規模なニュータウンの建設が始まり、経済の急速な成長を受けて1968年の霞が関ビルを嚆矢に都心、副都心には様々な高層ビルが出現、今や超高層は当たり前の時代となった。また、バブル経済が破綻した後も、都市再生政策によって、民間の活力を利用しながら引き続き都市の更新が活発に行われている。

そして、今、人口減少・高齢社会の到来、ICTの革命的進展、企業活動のより一層のグローバル化など新たな局面を迎えて、次の挑戦が始まりつつある。

次なる課題：国際都市間競争

現在、地球上には70億を超える人々が生活しており遠からず100億に達するが、実はその半数以上はアジアに居住している。また、アジア地域の経済発展は目覚ましく、世界を視野に入れる企業はこのアジア市場を無視することができない。特に中国の成長は著しく、国際的な大企業のアジア統括部署の多くは香港、シンガポールといった中華圏と英語圏が交じり合うところに立地している。そして人口に関しては、早晩インドが中国を抜くことは確実であり、やがてアジア市場の人口重心は徐々に西へ移ってゆくことになる。

こうした中で、アジア極東に位置する我が国はどのようにふるまうべきなのか？

厳しい国際都市間競争にどのように対応すべきであろうか？

新たな挑戦：戦う東京

国際競争の中で「戦える都市」の条件の一つは「時代の最先端の動きを誘い導く環境」を有することである。変化に果敢に挑戦する人々・社会の中でこそ新しい何かが生まれる。こうした「挑戦を受け止めることができる環境」を持つことこそ「戦う都市」の条件であり、この環境を持続的に保ち続けることが「戦い続けられる都市」の条件である。

江戸・明治の時代から東京の中心であった大手町・丸の内・有楽町地区は1988年から再生の議論が始まり、すでにかなりの更新が実現した。現在、渋谷、新宿、池袋といった地域で都市再生のプロジェクトが動いている。そして、近年、六本木、虎ノ門などに新たな業務拠点が生まれだした。こうした中枢業務機能を担う地区が複数、しかも時期を異にして生まれたのは東京にとって極めて幸いであった。ある地区が更新期に入っても、ほかの地域は東京の経済をしっかりと支え続けることができる。そして東京自身は「常に世界に対して新しいビジネス環境を提供する」という挑戦を続けることができる。こうした「システムとしての持続可能性」を備えた大都市は世界でも稀有である。

六本木から晴海方面を望む。

東京は「戦える都市」、「戦い続けられる都市」の条件を具備しつつある。

また現在、東京圏には3,500万人を超える人々が居住しており、やがてリニア中央新幹線が完成すればその規模はさらに広がり、大阪まで視野に入れれば7,000万人の巨大都市圏が出現する。極めて質の高い消費者によって構成される、これほどの人口集積市場は世界に存在しない。この東京市場で勝ち抜ける商品・サービスこそがアジア・世界で勝ち抜けるのであり、「戦う場」としての東京も無視できない。

新たな挑戦：魅了する東京

一方、近年我が国を訪れる海外からの観光客の増加も著しい。多くの人々は日本の文化・生活・歴史に魅力を感じて来訪するのであって、ビジネス環境に引き寄せられているわけではない。北海道から沖縄まで南北に長い島国、そこで培われてきた独自の文化・生活スタイルは我が国が誇るべき個性であり、そこには人々を魅了する多様な日本・個性豊かな日本がある。東京はその日本への入り口であり、その象徴的存在でもある。

そして東京自身もその多様性や包容力で世界を魅了している。世界屈指の長寿国、犯罪も極めて少ない安全な国、四季の変化を楽しめる自然豊かな国、その首都東京は中心に大きな緑と水を擁し、網の目のように張り巡らされた公共交通網によって誰もが自由に容易に移動することができ、そこには新鮮な刺激を与えてくれる様々な個性的界隈が広がっている。

青い空と澄んだ空気を取り戻した東京、誰もが様々なチャンスに遭遇できる東京、自らの希望に満ちた挑戦を繰り返すことができる東京、誰しも一度は住んでみたい東京、体感してみたい東京、こうした「人々を魅了する東京」を世界に素直に伝えたい。

戦う東京・魅了する東京、次の100年に向かって挑戦は続く。

時を振り返り、新たな都市の扉を開く。（写真は日比谷公園にある日比谷見附跡）

岸井隆幸
［きしい・たかゆき］
日本大学理工学部
土木工学科 特任教授
（一財）計量計画研究所 代表理事

建設省勤務を経て1992年日本大学へ、2018年より現職。（公社）日本都市計画学会会長、東京都景観審議会会長、同都市計画審議会都市づくり調査特別委員会委員長などを歴任、現在は千代田区都市計画審議会会長など。
『東京150プロジェクト』（新建築社、2015）など、東京関連の著書多数。